

再生可能なエネルギー

エネルギーセキュリティを確保する石油枯渇の時期を、少くも先送りすること。原子力を組み合わせた枯渇時期は、遠のく可能性がある。また、ハイブリッド化することで各々のエネルギー源が持つ固有のリスクが顕在化する確率を減らすことができる。

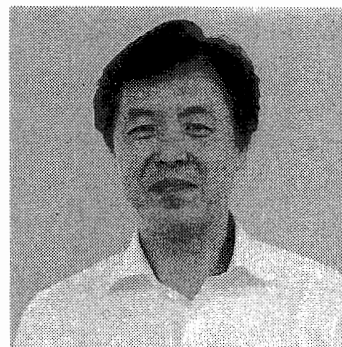
石油の枯渇は何十年も前から語られている。狼少年のような話だが、いずれ来ることは間違いない。同じ化石燃料でも天然ガスや石炭を上手くハイブリッドすれば、必ず新しい技術や社会シ

分散型
エネルギー
再生へ

エネルギー政策を問う ④

井熊 均 日本総合研究所
創発戦略センター所長

必要なのは重層的なハイブリッド思考



〈いぐま・ひと〉1958年生まれ。81年早稲田大学理工学部卒業、83年早稲田大学院理工学研究科修了。同年三菱重工業入社、89年同社退社。90年日本総合研究所入社。現在、同社執行役員、創発戦略センター所長。95年アイエスアイ・ジャパン設立と同時に同社取締役に就任(兼務)。03年イーキュービック設立と同時に同社取締役に就任(兼務)。早稲田大学大学院非常勤講師も務める。

システムが現れるかもしれない。楽天的な技術信仰は好きではないが、リスクが軽減されることは間違いない。エネルギーの需要は、世界で

供給が可能である、という考え方である。個人的には何度も述べていることだが、例えば、風力発電は原子力や火力の巨大な電力のプールがあるからこそエネルギー源として使うことができる。長年培った化石燃料を中心とした電力系統を有効に活用する、という意味では有効なことだが、化石燃料に依存している限り再生可能エネルギーのレベルまで進むと、多種多様な企業の活躍が求められるようになる。再生可能エネルギーを効率的に利用するには、エネルギーの特性に合わせた規模や仕様の発電システムが必要だからだ。そこで活躍するのは、これまでエネルギー産業を制してきた企業とは限らない。例えば、燃料電池の世界では、家電や自動車といった量産製品の分野の企業が有望視されている。パオエネルギーは従来型のプラント型に固執すれば本格的な普及は難しいだろう。小回りの利くエンジニアリング企業や地域密着型の企業が活躍する可能性がある。

給が極端にひっ迫すれば、ありとあらゆる社会システムは立ち行かなくなる。のだから、リスクが減ると分かっている策は積極的に進めていくべきだ。

まず始めに考えられるのは風力、太陽光、バイオ、等の再生可能エネルギーの組み合わせだ。ハイブリッド化を再生的に進むようなことがあれば、供給量ベースで完全な自立もあるかもしれないが、当面は現実的とはいえない。しかし、機能面での自立を図ることができ、一定の範囲内であれば再生可能エネルギーだけでもエネルギー

しかし、当然のことながら、この手のハイブリッド化によってエネルギー問題が根本的に解決されることはない。エネルギー

しかしながら、ハイブリッド化が再生可能エネルギーのレールまで進むと、多種多様な企業の活躍が求められるようになる。再生可能エネルギーを効率的に利用するには、エネルギーの特性に合わせた規模や仕様の発電システムが必要だからだ。そこで活躍するのは、これまでエネルギー産業を制してきた企業とは限らない。例えば、燃料電池の世界では、家電や自動車といった量産製品の分野の企業が有望視されている。パオエネルギーは従来型のプラント型に固執すれば本格的な普及は難しいだろう。小回りの利くエンジニアリング企業や地域密着型の企業が活躍する可能性がある。

しかしながら、ハイブリッド化が再生可能エネルギーのレベルまで進むと、多種多様な企業の活躍が求められるようになる。再生可能エネルギーを効率的に利用するには、エネルギーの特性に合わせた規模や仕様の発電システムが必要だからだ。そこで活躍するのは、これまでエネルギー産業を制してきた企業とは限らない。例えば、燃料電池の世界では、家電や自動車といった量産製品の分野の企業が有望視されている。パオエネルギーは従来型のプラント型に固執すれば本格的な普及は難しいだろう。小回りの利くエンジニアリング企業や地域密着型の企業が活躍する可能性がある。